

背中に石の冷たさを感じて、男は意識を取り戻した。

仕事を終えて帰る途中、何者かに襲われた——のだろう。頭がぼうつとする。襲われたときに剥ぎ取られたのか、服は何も着ていない。

痛む頭を押さえようとして、男は気がついた。

両手両足に頑丈な枷がはめられている。そこから伸びた鎖は石壁に繋がれ、ろくに身動きすることもできない。

薄暗い部屋。明かりはわずかなランプ。

男はこの牢獄のような部屋の中に捕らえられていた。

「やつと気がついたのね」

奥から聞こえたのは少女の声。

紅い二つの瞳が部屋の隅に灯る。

その紅い光が男のもとにすつと近寄ると、暗闇からにじみ出るように少女が姿を現した。

「壊さないように遊びなさいって、お姉さまに言われたの」

赤い服に黄色のスカート。頭にちよこんと帽子を乗せた、幼さの残る

可愛らしい少女だ。

「言いつけを守らないと、また閉じ込められてしまうわ」

陶器のように白い肌。

血に濡れたように紅い瞳。

「人間の里に行つてみたいって言ったら、ダメだつて言われちゃった」
背中から伸びた、生物のものらしくない鉤物のような羽。

「だからね、新しいおもちゃをちょうだいってお願いしたの」

噂話が好きな男は、この少女のことを聞いたことがある。

湖畔にある紅魔館に住み、最近は外にも姿を見せるようになったという、吸血鬼姉妹の妹。

妖怪の中でも飛び抜けて凶悪な少女。

フランドール・スカートレット。

「そうしたらね、あなたをプレゼントしてもらっちゃった」

悪魔の妹が嬉しそうに両手を合わせて無邪気に笑う。

少女は男のことを「おもちゃ」と言った。

これからいったい何が行われるのか。

不安に怯える男をよそに、フランドールは襟元のスカートに手をかけてするりと引き抜く。

捨てて。暗がりの中にフランドールの白い裸体が浮かび上がった。

「キレイでしょう？ 私の羽。ねえ、キレイでしょう？ 血に濡れたこ

の身体」

そう言うと、フランドールは男の身体に覆い被さった。

驚くほど柔らかい少女の身体。

なめらかな肌をしたフランドールが、男の上を這い上がる。

フランドールの身体から甘い香りが漂う。とても魅力的な香りだった。徐々に恐怖が薄れていく。

気がつけば、頬が触れ合うほどの位置にフランドールの顔があった。

そして、耳元で彼女がささやく。

「ねえ、遊びましょう？」

少女の裸を前にして、男の頭に淫猥な考えが浮かぶ。

だが、フランドールは男の返事を待たずに身体を引いていた。

そして、男の両脚の間に跨がるように腰を下ろす。

ふくらみの薄いならかな胸や、まったく遮るものない秘裂が男の前に晒されていた。

誘うように見せつけるフランドールの裸身から、男は目を離すことができない。

まるで、媚葉でも嗅がされたかのようだった。

先ほど触れた肌の感触が頭に浮かぶ。

あの柔らかな身体がどうしても欲しい。そんな暴力的な思いが急速に膨れあがる。掴み掛かろう手を伸ばしたが、手枷に阻まれ届かない。その苛立ちがますます男を興奮させていく。

「まだ全然触れてないのにもうそんなに大きくしてるなんて、変態さんなのかしら」

楽しそうな微笑みを浮かべて、フランドールは男のそそり立つ股間に触れた。

「それに、こんなに硬い……」

フランドールの小さな手に撫でられただけで、びくりと跳ね上がる。

男のモノを面白そうに眺めていたフランドールは、おもむろに屈み込むと先端に軽くキスをした。

「ちゅ……ん、は……ふ」

そのまま亀頭の周りに舌を這わせていく。

「ん……ちゅ、ん、んっ……、っ……ちゅ」

啄むようなキスと舌先で突くだけの軽い愛撫。それが先端だけに繰り返される。快感が先端に止まり身体の奥まで届かない。執拗に焦らされる男のモノは、さらに大きく硬くなっていく。

「っは……、ふふ、ね、きもちいい？」

残忍な悪戯をしている顔で、フランドールが男の顔を見上げた。

わかっていてやっている顔だった。

わざと大きな刺激を加えないまま、焦らし続けて男がどこまで耐えられるか楽しむつもりなのだ。

男に向けられるフランドールの目がすつと細くなる。「ねえ、遊びましょう？」——無言のままそう語っていた。

状況に流されるだけだった男の中に怒りが沸き上がる。その怒りを込めて、男はフランドールを睨み返す。

するとフランドールは、意外なことにびっくりした様子で男の視線を受け止めていた。やがて楽しそうに笑う。

「ごほうび、あげる」

そして、フランドールは口を大きく開け、男の先端を咥え込んだ。

「……は、む」

あまり大きくはない口の中で、先端が鉛を転がすように舐め回される。

「ん……あ……は……ふ……っ……」

唾液に濡れた口腔に亀頭が包み込まれ、時折伸びてくる舌がカリ首を這い回る。

「は……ふあ……ん、んっ……ちゅ……っ」

舌が裏筋を何度も往復し、筋の隙間まで丹念に舐め上げられた。舌先で先端をつつかれると、誘い出されたようにカウパー液が溢れ出す。それをフランドールは、尿道に舌先を差し入れて掬い出し、こぼれそうになる唾液と一緒に飲み込んでいく。

先ほどよりもずっと大きな快感。

だが、やはり刺激は先端だけに集中していた。竿に軽く添えた手は動かず、奥まで飲み込もうともしない。上目遣いで男を見上げるフラン

ドールの目が意地悪に笑っている。

それでも、こんな刺激に長時間耐えられるわけではない。

腰の奥に溜まった快感が、何度も大きく膨らんでは引いていく。

その間隔が短くなってきた。

男の口からうめき声が漏れる。

それに気づいたフランドールが尿道に尖らせた舌先を差し入れてきた。止めとばかりに舐め上げられる。

快感が弾けた。

男の視界が白く染まる。

大きな衝撃。

溢れ出す白濁液をフランドールの口の中にぶちまけた。

一度や二度では収まらない。焦らされただけ何度も衝撃が訪れ、そのたびに吐き出していく。そのすべてを、フランドールは口の中で受け止めていた。

ようやく男の射精が落ちていた。

フランドールは口の中に男の精液を含んだまま顔を上げる。そして、

口元にあてた手の上に口の中の精液を広げた。

「こんなに出るんだ」

まだ口に残っている男の精液を飲み込みながら。

「でもこれであなたの方はいいよね。次は、私の準備」

フランドールが男の脚を挟んだまま膝立ちになる。毛の生えていない脚の付け根が丸見えになった。その間にある微かに湿り気を帯びた割れ目を、フランドールは自分の指で押し広げる。

「……ん」

光の少ない部屋の中でもわかる鮮やかなピンク色。

「私は痛くても平気だけど、濡れてないとあなたのがダメになっちゃうよね？ だから——」

そう言うと、フランドールは指先に男の精液を絡め、割れ目の中に差し込んだ。

「ふあっ……！」

根本まで挿れた中指で掻き回して引き抜くと、入り口を撫で回しながら指に精液を絡め直して再び奥まで沈めこむ。

「んうっ！ は……っ、あ、んん……っ」

男の目の前で、ぬらぬらと光る秘裂を白い指先が出入りする。精液を奥まで塗り込むような指の動きから男は目が離せない。

「まだ……ん、あつたかいよ……」

フランドールの痴態を見せつけられて、男の股間は勢いを取り戻して脈打っていた。

「あ……おつきくなった」

男の回復を確認したフランドールは自分の中から指を引き抜く。奥から溢れ出した愛液とフランドールが塗り込んだ精液でどろどろになっていた。

すつかり硬くなった男の肉棒にフランドールの手が触れる。

蜜壺の入り口に導かれた。

ちゅぷりと、先端にぬめり。

フランドールの口元が、ニイっと吊り上がる。

「あは……入れちゃえ」

するとフランドールは、いきなり全ての体重をかけて硬い肉棒の上に腰を落とした。

「っ、ああああああああああああ——っ!!」
男のモノが膣内を一気に貫き、一番奥を突き上げた。室内に悲鳴のよ
うな絶叫が響き渡る。

フランドールの身体は大きく反り返り、背中の羽が痙攣するように震
えていた。

ただでさえ小さな身体。いくら濡らしてほぐしたといつても中指一本
分。それも子供の指だ。男の太い肉棒をいきなり全部挿れるのは無理が
ある。

しかし、フランドールは身体を浮かせると、再び体重をかけて腰を落
とした。亀頭が見えるまで引き抜かれた肉棒が、一気に根本まで見えな
くなる。

「ひううああんんんんんんん——っ!!」

暗い部屋の中でまた悲鳴が上がった。

そんな乱暴な挿入をフランドールは繰り返す。

男のモノは狭い膣の中で強引に擦り上げられていた。フランドールが
身体を落とすたびに、激しい快感が先端から根本まで走り抜ける。肉棒
はさらに硬さを増していき、それがフランドールの内側をますますきつ
く挟る。

そんな行為が何度か繰り返されたあと、男の上でフランドールの動き
が止まった。

息遣いは荒い。羽はまだ痙攣を繰り返している。それなのに、フラ
ンドールの表情は恍惚としていた。

「すごい…よ。まるで…、身体の…奥に、杭を…打ち付けられてる
……みたい…」

心臓に杭を打ち付けると吸血鬼は死ぬという。では、肉杭を打ち付け

られたらどうなるのか。

潤んだ紅い膣が男に向けられていた。

「続き、するね」

身体を浮かせたフランドールは、男の身体に手を添えると、今度は
ゆっくりと下ろしていく。

「ん、はああ…」

中は柔らかく、もうすっかりほぐれていた。

「んんっ…、ふあっ」

半ばまで引き抜かれ、すぐに飲み込まれる。緩やかな動きでぬるりと
した膣壁が絡みつき、往復するたびに肉棒を舐めていく。

「はあっ…んうっ、ふあっ…ああっ!」

浮かせて沈めて、引き抜いて飲み込んで、抜いて挿れて抜いて挿れ
て。

じゅぶつじゅぶつと、リズムを取るようにフランドールが上下に動い
ていた。

次第にそのペースが速くなる。

「はうん! あんっ、あっ、んんっ! ふっ、ああんっ!」

信じられない気持ちよさだった。

肉棒の先端から腰、脊髄にかけての神経が吸い出され、むき出しのま
ま快感の蜜に漬け込まれるような感覚。

撃ち込まれる快感が背中を走り抜ける。

込み上げる射精感。

男根がびくりと震えた。

「んああっ! いふようっ! ねえっ! いくからっ! だしてっ!
だしてえーっ!!」

男のモノを奥まで啜くわえて膣内くわいがきゅうつとすばまった。

「っ、くうううううううううう——っ!!」

大きく仰のけ反ぞり羽つを突つ張り、結合部くわごうぶを深く強く押しつけながらフランドールの身体しんたいが何い度も跳はねる。

その振動しんどうに男根おんどんを刺し激げきされ、耐たえきれずに沸わき上あがるまま、男は二度三度とフランドールの中に精液せいえきを吐はき出した。

「ふああ……っ！ とけうっ……とけるよう……!!」

フランドールは絶頂感ぜつちやうかんに身体しんたいを震ふるわせながら、注つぎ込まれた白濁液はくだくえきを胎内たいないに飲のみ込んでいく。

「あつたかいのがきもちいい……」

上うを向むいたまま身体しんたいを硬かた直ちさせていたフランドールが、崩くれ落おちるように男おとこの上うへに倒たれ込こむ。

「すごい……」

嬉うれしそうにつぶやくのが聞こえた。

フランドールは甘あまえるように男おとこの胸むねに顔かほを擦こすりつけながら身体しんたいを休やすめていた。ときどき、伸のばした舌したが男おとこの肌はだに触ふれて汗あせを舐なめ取とっていく。

しばらくして、落おち着きいたフランドールは男おとこのモノを身体しんたいの中なかに残のこしたままゆつくりと身体しんたいを起たてた。

「あなた、すごい……。気きに入いつちやつた……。ねえ、私わたしとキスをしませう?」

フランドールはそう言うと、何なにのつもりなのか自分の指さしに唾つばみ付ついた。傷口きずぐちからあふれる血ちが赤あかい糸いとを引ひく。

その血ちを舐なめ取とり傷口きずぐちを吸すい、口くちの中なかに血ちを含こんだまま、フランドールの唇くちびるが男おとこの唇くちびると重かさなった。

「ん——」

わずかに開ひらいた隙間すきまからフランドールの舌したが差し込まれ、口くちの中なかに血ちの混まじった唾液だえきが流ながし込まれる。

何なにのつもりだろうか。疑問ぎもんを感じながらも、男おとこは流ながし込まれたものを飲のみ込んだ。喉のどの奥おくでゴクリと音が鳴なる。

フランドールの目めが嬉うれしそうに細こまめられた。男おとこの舌したに舌したを絡かめ口くちの中なかを舐なめ回まわして、フランドールはゆつくりと唇くちびるを離はなす。

思いもしなかった濃厚のうこうなキスに男おとこは陶然とうぜんとしていた。

「ふふふ……あなたはもう、私わたしのもの」

口元くちもとに指さしを当て、楽やすしそうにフランドールが笑わらう。

それが合図あひずだったのかもしれない。

どくり——と、男おとこの中なかで何なにかが脈打みやくつ。

身体しんたいの中なかが焼やけるように熱あつい。

「知しってる? 吸き血鬼きけつって、血ちを飲のんだ人間にんげんを吸す血鬼きけつに変かえることができるの」

フランドールの瞳ぶが不気味ぶきみな光ひかりを放はなつ。

「そして、自分の血ちを飲のませた人間にんげんの自由じゆうを奪さらうこともできる」

男おとこを拘束こうそくしていた手足てあしの枷かせが外とされた。だが、男おとこは身体しんたいを動かうごかすことができない。

「だからね、私の血ちを飲のんだあなたの身体しんたいは——もう、私の物」
腰こしにぞわりとした感覚かんかくが生まれた。フランドールの中なかに入いれたままの男根おんどんが、刺し激げきを受うけないまま硬かたくなっていく。

「ねえ、まだ続けましよう?」

男おとこのモノがはち切れそうな程ほどに勢いきほいを取り戻もどすまで、ほとんど時間じかんは

かからなかった。大きくなったことを中で感じ取ったフランドールが、さっそく動こうと腰を浮かす。

ところが、すぐにバランスを崩して倒れ込んでしまった。

「……？」

フランドールは不思議そうな顔をして身体を動かそうとする。

「張り切り過ぎちゃった……かな？」

激しく動きすぎて腰に力が入らないようだった。もともと身体を揺らすと思うように刺激が得られず、次第に不機嫌な表情になっていく。

そんなフランドールの顔に、ぱあつと笑顔が浮かんだ。名案を思いついたという様子だった。

「ね、あなたに命令するわ。——上になって、私を犯しなさい」

男が何かを考える前に身体が勝手に動く。

いままで上に乗っていた小柄な身体を床に押しつけた。その上に覆い被さる。フランドールの腰をしつかりと掴むと、まだ入ったままだった肉棒を途中まで引き抜き、じゅぶりと勢いよく突き入れた。

「んあうっ！」

奥を突かれてフランドールが仰け反る。絶頂を迎えたあとで敏感になっっているようだった。

「っは……っす、好きなように……動いていいよ。でも、全部抜くのは、ぜったい許さない」

言われて男の腰が動き出す。

男の意志なのか命令のためなのかわからない。

乱暴に突き入れていく。

「んくっ……はあっ！ んあっ！ あっ……ふあっ！ ああっっ！」

敏感な膣内を硬い肉棒が激しく往復し、フランドールの身体が何度も

跳ねる。

だが、男は勢いを緩めない。

なぜなら「犯せ」と命令されたから。

それに、絡みつくようなフランドールの膣内は、恐ろしく気持ちよかった。

「ひうっ！ はやつ、あう！ ああっ！ もうっ、なかつ！ くるっ！

さちやうう！」

フランドールの身体が大きく反り返り、びくりと一際大きく跳ねる。

「はあああううう——っ!？」

しかし、男は動きを止めなかった。

絶頂に震えるフランドールを押しさえつけ、締め付ける膣内を強引に往復する。

「うあっ！ ぐう……っ、かはっ！ ひいつてっ！ ぐう……っ！

ひつてるう！ のにい……っ！」

男はフランドールの様子を気にもとめない。さらに激しく腰を振る。

「とまんないっ！ とまんないよう！」

痙攣する膣壁が新しい快感を生み出していた。湧き出す快感を少しも逃すまいと、深く強く突き入れる。

もはや、自分の中に理性が残っているのかもわからない。

「はあう……ふあっ……、んっ！ ふうっ……あっ、ああ……っ！」

ようやく絶頂から解放されたフランドールはぐったりしていた。

男はかまわず激しく犯し続ける。

止めるわけにはいかない。それがフランドールの「命令」だから。

「んはあああっ！」

入り口ぎりぎりまで引き抜いて、一気に根本まで突き入れる。そのた

びに、身体を仰け反らせたフランドールが鳴き声を上げる。

そんな、初めてフランドールの中に入ったときと同じ動きを繰り返す。

やがて腰の奥に熱い物が集まる感覚が生まれた。

腰の動きを速くしていく。

射精が近い。

幾度か大きく動かして、とどめのひと突きを打ち付けようとした時。

「だめえっ！ まだだめえっ！」

突然、男根の根本を締め付けられるような感覚。

一気に奥まで突き入れた。

だが、訪れるはずの絶頂感がない。

さらに何度も叩き付ける。

いまにも出してしまいそうなのに、射精することができなかった。

「あなたの、からだ……っ、わたしのもの、だから……っ！」

激しく突き上げられながら、フランドールがそんなことを口にした。

「も、もういつかいつ……いかせてっ！ そしたら……っ、ださせてあげるっ！」

すでに限界。いまにも爆発しそうだ。

そんな肉棒を根本まで突き入れる。

「はあううっ！」

フランドールが悲鳴を上げる。まだ出すことができない。さらに乱暴に突き入れた。中の襜が肉棒を擦る。快感が走り抜け、射精感が高まる。

それなのに、何度突き入れても出すことができない。

「あうっ！ はあっ！ あっ、あーっ！ ひうんっ！ うあっ！ は

ああっ！」

男はフランドールの腰を掴んで浮かせると、力任せに腰を叩き付けていた。

男の腰に打たれてフランドールの肌が赤く染まる。加減をする余裕など無い。乱暴に野獣のように、フランドールの中を蹂躞する。

「はあっ、あっ、ああっ！ んあっ、くるっ、ようっ！ んうっ、も、いい！ いいからあっ！ ひうっ……だしてっ！ だしてえっ！」

射精を抑えていた力が緩み、解放された灼熱が走り抜ける。深く強くフランドールの中に突き入れ、溢れ出す精液を胎内にぶちまけた。

「ああっ、あ、ああんうううう——っ！！」

しかし、まだ残っている。抑えられていたモノを出し切ってしまうまで終わらない。フランドールの一番奥に繰り返し肉棒を叩き付け、その度に白濁液を吐き出していく。

「はあっ、あう……っ！ んうっ、ん……はう……っ。ふあ……っ」

男は全てを流し込んだ余韻に浸っていた。

だが、まだ硬さが残る肉棒はフランドールの中でびくりびくりと脈打っている。すぐにでも勢いを取り戻せそうだった。フランドールの血を飲んだ影響なのかもしれない。

肉棒を少し抜いて、深く奥まで差し込んだ。

「んんあ……っ」

力なく横たわるフランドールは抵抗なく受け入れる。

次の往復は入り口まで引いて大きく。

「ああ……はああ……ん」

あえぎ声を漏らすフランドールは、楽しそうな顔をしているように見えた。

男はどろどろの蜜壺みつぼを肉棒にくぼうで掻き回し、快感を引き出そうとする。何度か往復するうちに、男のモノはすっかり元の硬さに戻っていた。

「あつ……ふあ、んつ……あつ、あは……つ、あははは……っ！」

哄笑こうしょうするような声がフランドールの口から漏れた。

ふと、フランドールと目が合った。

吸血鬼きゆうけつぎの紅い瞳ひとみ。

男の身体を支配する紅い光。

気がつくと、男の身体が勝手に動いていた。

フランドールの身体を抱え、後ろ向きに倒れ込む。男の上にまたがる形になったフランドールの割れ目に、ずぶずぶと男根だんこんが飲み込まれていく。

「あははははははっ！ いいよ！ やっぱりあなたすごいよう！ まだおわりじゃないよね？ もっとたくさんしたいよね！ もっと！ ねえ、もっとつづけてくれるよね!!」

フランドールが望むまま、男は腰を跳ね上げていた。

「ひゃうんっ！」

浮き上がり落ちてきたフランドールの身体に、また腰を叩き付ける。

「っ、はははっ！ 好きよ！ 大好き！ 気に入ったわ、あなたは殺さない！ 生きている間、ずっとずっと私の竿奴隷きおどれいにしてあげるっ!!」

紅魔館こうまかんの地下室かみかに、嬌声きやうせいの混じった狂笑きやうしょうが長く長く響き渡った。